第八章　宴

「それじゃまた明日　」
二人だけの補習の帰り道、和正はそっけなく言う。
「うん。じゃあ……　」
俯く優奈と視線を背ける和正。夏の午後は日もまだ高く、それでも時計は夕暮れ時を示す。
「その……　」
「えと……　」
同時に口を開き、譲り合う。話す事など、帰り道で十分に話してきた。
勉強のこと、部活のこと、水泳の仕方、テレビのこと、ネットで見たニュース、新聞記事、週刊漫画、残りの休みの過ごし方、行きたいところ、したいこと……。
暗い話題を避けて気を遣うような息苦しさがあるけれど、昔と同じく一緒に居られるのが嬉しかった。
ずっと前から優奈が好きだった。好きだったから、彼女の道をじゃましたくなくて、だから遠ざかろうとした。
バカみたいな選択だったと、今なら思う。けれど、自分と優奈の居場所は……。
「優奈……？　帰ってたの？　」
玄関ががちゃりと開き、優奈の母が顔を出す。母は険しい表情で優奈に歩み寄る。
「優奈、最近ゼミ、さぼってるって聞いたわよ？　どうしてさぼるの？　受験は夏の今の時間が大切なの。母さん、いつも言ってるわよね。せっかく特進クラスなのに、あんまりさぼるようなら進学クラスに降格するって言われたわ。あんた、どう考えてるの？　」
早口でまくしたてる母に優奈は何か反論をしようとしたけれど、自分の我儘とさぼりが原因なのですぐに俯いてしまう。
「ごめんなさい。来週からはちゃんと行くから……　」
「当たり前でしょ。ちゃんと勉強して受験に勝ってよ。それが優奈の幸せの為なの。お母さん、貴女の為を思って言ってるの……　」
「うん、わかってるよ。頑張る。それに、今日だってちゃんとゼミの課題してたし　」
「それならどうしてゼミでしないの？　ゼミの自習室あるよね？　そこで勉強すればいいじゃないの。それをなんで……、どこでしてたの？　図書館？　」
「それは……その……　」
「……また田所君と？　ねえ、田所君。前にも言ったわよね。優奈は勉強が忙しいの。君も補習とかでいろいろ大変なのはわかるけど、うちの優奈の足を引っ張ることしないで　」
「お母さん、そんな言い方無いよ　」
「優奈、貴女は黙ってなさい。今はただのお友達と遊ぶのも気分転換になると思ってる

かもしれないけれどね、そういうさぼり癖が良くないのよ。お母さんはわかるの。田所君だって水泳部があるんでしょ？　自分の進むべき道を進んだ方がお互いのためなのよ。そりゃ田所君は昔から優奈によくしてくれてたけどね、もういい加減、そういう付き合い方を見直すべきだと思うのよ。おばさんの言ってる事、間違ってるかしら？　」

「お母さん！　」

「間違ってますよ　」

優奈が声を荒げると同時に、和正は平然と話す。

「勉強が大事なのはわかります。でも、それで優奈が困っているのに、付き合い方を替えて見過ごせなんて間違ってます　」

「な……田所君、君ねえ、いい？　君みたいな補習続きで学校でも問題を起こしている子が何を言ってるの？　こんなことは言いたくないけれど、君の噂とかいろいろ耳に入って来るの。君だって色気づいて優奈に……　」

「お母さん！！　」

下卑た話になりかけたところで優奈は激昂したらしく、いつになく大きな声を出す。

「お母さん、そんなの根も葉もないデタラメよ。誰から聞いたのよ　」

「誰って、それは……、でも、とにかく、田所君、これからはうちの優奈には近づかないようにしてほしいの。いいわね　」

「なんでそんなことお母さんに言われないといけないのよ！　」

「それは私が貴女の母親だからよ。いいわね　」

「そんなの変だよ！　おかしいの　」

「貴女がちゃんとゼミに行っていたらお母さんもこんなこと言わなかったわ。でも、田所君と一緒になってさぼるんだからしょうがないじゃないの　」

「そうやって話を逸らさないでよ　」

「逸らしてないわ。とにかく、これ以上おかしなことにならないようにしないとね。もし今後もかげでこそこそ会うようなら、田所君の御両親ともお話をしないとね……　」

「俺は間違ったことなんてしてません。優奈が困っているなら、その力になります　」

「……ふん、ほら、優奈。田所君は帰るようよ。貴女も部屋に入りなさい　」

「お母さん、話を聞いてよ……　」

再度あがくけれど母は聞く耳をもたずに優奈の腕を引っ張る。それ以上は無意味だろうと、和正は首を振り、背を向けた。

「和正君、またね。また来週ね。絶対だよ　」

背中を向けつつ右手を上げる。

「きっとだから　」

ほっとしたような声を聞き、改めて気持ちを固める和正だった……。

夜、残りの課題を終わらせようと、辞書やら教科書を広げていた。
少しでも優奈の負担を減らすには、課題を終えること。そうすれば優奈はゼミの課題に専念できるし、試験前の個人補習を減らせるはず。
最初からそうしていればよかったのにと思いつつ、それでも遅すぎることはないと気合を入れる。
最近は優奈に勉強を教えられ、コツというか、調べ方、関連のつけかたが見えて来た。少しは要領よくなったのだろうと思う頃には課題も終盤に差し掛かる。そして時計の針も明日に近づいていた。
トゥルルル……。
階下で音がした。
「？」
夜中に電話？　もう明日になるという時刻なのに？　そんな疑問を抱く。
「……」
しばらく耳をすませていると、何も聞こえない。
ふぅとため息をつき、夏の夜に怪異現象など……と苦笑しテキストを閉じる。
トゥルルル……。
そしてまた……。
今度は意識していたせいか、確かに聞こえた。
「うそだろ……」
和正はおっかなびっくりになりながら、階段を降りる。
両親は既に寝ているので一階は真っ暗。そんな中、またも点滅する電話は軽くホラー。
「……もしもし……」
和正はおっかなびっくりしながら受話器を取る。これでうらめしや……などと言われたら両親を起こすぐらい悲鳴を上げる自信がある。
『あ、良かった……和正君』
受話器の向こうからは優奈の声がした。
「なんだ、優奈か……。脅かさないでくれよ」
『えへへ、ごめんね。お母さん、電話長いから、深夜になっちゃった』
「いいよ。俺も起きてたし」
『なにしてたの？』
「ん？　そりゃ、色々だよ……」
負担にならないように勉強してましたとは言えず、適当に誤魔化すが、くすくす笑い声が聞こえてしまう。
「ったく、用が無いなら切るぞ」
『あ、まって……その、今日の事……ごめんって言おうと思って』

「優奈が謝ることじゃないよ。俺もおばさんの言うことわかるし、だからといって見過ごしたりなんかしたくない。だから、今日だって課題をだな……」
『ふうん、頑張ってくれてたんだ……。うん、がんばれ』
「優奈こそな」
『うふふ。はーい、もうさぼりません。ちゃんとゼミも行くし、和正君の勉強もね……』
「ああ。頼むよ」
今度は素直にそう言えた。片意地を張っても離れるばかり。それは結果的に傷つけるだけのこと。せめて離れるにしても、今度はちゃんと自分の意思で、誰かに言われたのではなく、決断したい。
「なあ、俺も課題終わりそうだし、残り数日の夏休みだけど、どっかに行かないか？」
『え？　どこか？　うん。いいよ。来週で夏期講習終わりだし、久しぶりに街の方に行きたいな』
「ああ。いいぞ。どこ行く？　映画に駅前にプール……」
『……』
思わず口に出た言葉に和正はしまったと舌打ちする。
懸念事項である浩司達のことを話題に出すのは憚られる。変に意識しなければまだしも、言い終えて口ごもってしまった。これでは浩司達の事を意識していることが伝わってしまう。
『大丈夫だよ。うん、きっと何とかしてくれるから……』
けれど、意外なことにしっかりとした返事が返って来る。何か良い方法でも見つかったのだとしたら気になるが……。
「それってなんかあったのか？」
『うん、ちょっとね。チアリーディング部で知り合った先輩が色々話つけてくれるって言うから、だからもう和正君も心配しなくていいよ』
「へえ、そんな人がいるのか」
チアリーディング部は女子だけだが、浩司達に物怖じせずに話を付けられる女傑もいるのだと感心してしまう。
「まだ練習してんの？　チア部」
『うん。来週の準決勝かな。勝ったらもう少し延長って感じ』
「そっか。芳雄の奴も張り切ってたしなあ、俺も応援に行こうかな」
『え、応援？　来るの？』
「ああ、ついでに優奈のチア姿も見たいかな」
『それはちょっと恥ずかしいかな……』
「なんだよ、まあしょうがないか。俺も課題の残り終わらせたいし、大人しくしてるよ」
『あ、ごめん、お母さん起きてきちゃった。電話切るね……はーい、わかってるよ。ちょっとゼミのことを千絵に聞いただけだから……』

電話の向こうでは母と優奈の言い合う声が聞こえた。もし受話器を取られたら言い逃れもできないと、和正も声を絞る。

『ごめんね。でも、もう大丈夫だから。もう和正君も心配しなくていいからね』

「そっか良かったな。んじゃ、おやすみ」

『うん、お休み。また来週ね』

「ああ」

また来週、プールの後か、それともゼミが終わるのを待つか……。

いつになく早めに課題を終えることができたのだから、残りの休みの間ぐらい優奈と一緒にどこかへ行ってもいいはず。

和正は受話器を置くと、急いで部屋に戻る。お小遣いの残りはどれだけあっただろうか確認するために……。

＋＋

「……これ？　」

球場の更衣室で新たな衣装を手にした優奈は言葉を失いかけた。

前のビキニ風の衣装に比べて布地は多い。ただ、問題はそのデザイン。

ハイレグ水着とミニスカートのようなフリルが腰周りにつく。おへそより下にリボンがついていて、そこだけ見るとまるでパンティのよう。

胸元は伸縮素材なのだが、素材が安っぽく、引っ張ると薄く透ける。しかも胸元を強調するようにハート形になるようにフリルで決められている。

夏だというのに太腿までカバーするニーソックスがあり、ガーターベルトのように股間部分とサスペンダーで止めるようになっている。

しかもサス部分にも白と黒のフリルが付いており、ソックス部分は伸ばすと網目状。

「……うん。その、これしかないから　」

奈津子は心の曇り具合の見える作り笑いをしつつ、その衣装を部員に手渡す。

部員は恥ずかしさを誤魔化す為に茶化しつつ、文句言いながらも着替える。

「……　」

一人反対したところで覆らないだろう。体操着でベンチに行くことも考えたが、他の部員に対して悪い。それに浩司のことを信彦に頼む手前、義理を果たすべきと考え直す。

「優奈、嫌なら……　」

「ううん、大丈夫。でも、次は前の衣装の方が良いかな　」

「うん、そういう風に頼んでみるから　」

奈津子はふぅとため息をつき、衣装を手にする。優奈もそろそろ着替えないといけないとロッカーを開ける。

「あ、優奈はこっちのロッカー使ってよ。そこは使用禁止っぽいから　」

和美が隅っこのロッカーを指差し手招きする。

「え？　そうなの？　」

ロッカーが壊れているのかと思うも、異変は見られない。何か汚れているわけでも、臭いがするわけでも無い。

「え？　大丈夫だよ。優奈はそこのロッカー使って　」

慌てた様子で奈津子が制す。

「でも、そこは……　」

「いいから。ね。優奈、そこのロッカー使ってね　」

「う、うん……わかった　」

奈津子に背を押されてそのままそのロッカーに手をかける。

開くと既に誰かの荷物が置かれていた。茶色の小さな鞄が置かれていて、やや半開きに

なっている。既に誰かが利用中だから止めたのだろうと納得した。
ファーーーーオーーーーーーンーーーーーーウーーーーーン……。
試合開始を告げるサイレンに中断させられる。優奈は慌てて隣のロッカーを開いて着替え始めた……。

＋＋

「フレッフレッ！　オニガワラ！　もっともっと！　激しく、激しく腰いれて振って！　ずんずんついて！　してほしい！　どんどんきて！　あたし、あなたといきたいの！！」
相変わらずの応援セリフに優奈の表情は硬かった。
少し前なら変なセリフ程度に思っていたが、祭りの一件以降、その意味合いがわかり始めていた。
激しく欲しい、いきたい、きもちい、飛ばして、きてきて、いっちゃう……。
性的な意味合いを含みかねない言葉の羅列と胸元、オシリにアピールの多い振り付け。誰が考えているのか走らないが、ここまで重なると確信してしまう。
「あーん！　すごいよ……すっごいのきちゃった～！　いっちゃったね……。このまま一緒だよ」
白球フェンスを越えたのを見て、別の振り付けでくるっと回る。その時、夏の炎天下にも関わらず、帽子にマスク、サングラス姿の男が見えた。その手には見覚えのある古びた鞄があり、半開きの口を優奈達に向けていた。
「……」
不審に思いつつも続く打球に振り付けを揃える。
新しい衣装はサイズが少し小さく、材質が伸縮性なので身体をきゅっと締め付ける。ぴたりと貼りつくせいで、乳首が浮き出てしまう。
できればブラジャーやアンダースコートを付けたかったのだが、微妙にはみ出るせいで逆に恥ずかしい。それでも布地面積は前より多いのだと自分に言い聞かせて我慢する。
今日の応援が終わればきっと信彦がバスケ部の竹中？　に話を通してくれる。そうしたら浩司達も大人しくなるはず。だから今はその為に応援を頑張るのが最適解……。
「やーん！　さいっこうだよぉ……こんなきもちいいの、初めて……、あたしのHATUTAIKENN、最高の思い出になっちゃった……あなたのおかげなの……うふ！」
前傾姿勢で胸元を強調する。くいっとおさえると、乳首が擦れてくすぐったい快感が起こる。
「あん……」
思わず甘い声を出しつつ、ウインクをする。ちゅっと唇をすぼませるまでが振り付けだが、グラウンドまでの距離を考えれば見えるはずもない。少しぐらいはしたなくても誰も気づくはずがない……。

「……？」
今日は厚着の観客が多いらしい……。

＋＋

「ゲームセット、鬼瓦第二校の勝利。互いに礼！」
「ありがとうございました！！」
「ありがとうございました！」
試合の終了を告げるサイレンと、互いに健闘をたたえ合う球児たち。
大した窮地も無く、順当に勝ち鬼瓦第二校ナインの姿は凛々しく思えた。
彼らが応援席に礼をするのを見て、チア部の面々も前に出る。
「ありがとうございました！」
「最高だったよ、今日のこと。ずっと感じまくりだもん、濡れちゃった！　すっごくきもちよかったもん！　このまま次も気持ちよくいかせてね！　フレッフレッオニガワラ！　やっちゃえ、いっちゃお！　さいこー！　あーん！！」
申し訳程度の応援のセリフと卑猥な言葉を並べるのも次まで。仮に全国大会へ行っても、その時は勉強を理由に断るつもりだった……。

＋＋

「おっし、今日も勝ったぞー！　次勝てば全国じゃん。やっぱ俺ってすげーな」
「なにを言っている。俺が打ち崩したおかげだ」
「バカを言うな。俺の長打があるからこそ、点が入ったんだろうが」
またいつもの俺が俺がの言い合いが始まる三人。
「……はぁ……」
そんな中、奈津子は俯きながらため息をついていた。
「どうかしたの？」
嬉しくないのだろうか、それとも熱中症で気分を悪くしたのか気になり尋ねる。
「んーん、ちょっと疲れただけ。それより、優奈は午後の予定ってある？　祝勝会をしたいんだけど……」
「祝勝会って、まだ決勝戦があるんでしょ？」
まだ優勝、全国には一試合残っているのに気が早い気がした。
「うん。そうなんだけど、でも、その前に英気を養うというか……その、先輩達も優奈に参加してほしいって言うし……。もちろん無理にとは言わないわ。優奈もゼミがあるもんね……。勉強、忙しいんでしょうし、無理なら無理で……いいし」
「えー！　ゆーなちゃん来ないの？　俺、こんどこそ優奈ちゃんが良いのになー！　ね

ーねー、いいじゃん、ちょっとぐらいさ～ 」
盗み聞きしていた俊夫が口を挟む。
揺れるバスの中、座席の肩を頼りにふらふら千鳥足でやってくると、奈津子を気にせず身を乗り出す。
「ねね、いいじゃん。いいじゃん？ だめなん～？ 」
「その、ええと、今日はその…… 」
今日はゼミが無いが、和正が自宅で課題に取り組んでいるだろうと思うと手伝いに行きたかった。母とのことでまた溝が深まってしまわなかいかと電話をしたけれど、やはり直接会って話したい。
その一方で気になることもある。バスケ部の竹中という先輩に話をつけてもらいたい。
バスケ部の有力者なら、彼らの横暴なふるまいを嗜めてくれるはず。その為にも信彦に念を押したかった。
「おい、俊夫、優奈君が困っているじゃないか。無理を言うな 」
「おーいおい、なんだよ格好つけてよー！ お前だってさー！ 」
「ふん、馬鹿め。それよりも優奈君、この前の不届き者のことだが、あれから竹中と話をしたが、どうもな……。今日の祝勝会に来させるから、そこで少し説明をしてもらえないか？ どういう嫌がらせを受けたか……。話したくないことは話さなくていいが、君が言うのと俺からのまた聞きなら説得力も違うだろう。頼めるかな？ 」
「そうでしたか……。はい、わかりました。それに私も一緒に勝利をお祝いしたいです 」
渡世の義理、多少の妥協はつきものと営業スマイルで頷く優奈。
「ごめんね、優奈 」
俊夫に邪魔されながら申し訳なさそうに謝る奈津子は、どこか伏目がちだった。その向こうで和美は腰をさすりながらそっぽを向いていた……。

＋＋

キャプテンと部長が校長に準決勝進出の勝利の報告しているのを後目に、信彦達は柔剣道場へと向かう。
奈津子もチア部ということもあって報告の席には並ばず、先導して部室へと向かう。
「祝勝会なんだけど、さっきの衣装で参加してほしいのよ 」
「え、またあれを着るの？ 」
「うん。嫌なら前の衣装でもいいんだけど 」
ビキニ姿とセパレートタイプ。どちらも恥ずかしいけれど、布地面積を考えれば答えはおのずと導かれる。
「わかったよ 」
新しい衣装に手に取り、着替え始める。

「あれ……？」
「どうかしたの？」
「これってさっきのと違う？」
「え、ああ、うん。その、さっきのは汗かいちゃったでしょ？　だから気持ち悪いかなって思って……」
「そう」
炎天下の中ではしゃげば当然汗もかく。奈津子の言うこともっともかと思えた。
「……」
前の衣装と違い、股間部分の触れ方が変だった。切れ込みがきわどいせいもあってパンティがはけず、股間部に縦に伸びるファスナーも変。
「……あのさ、ブルマ、穿いてもいいかな？」
下にパンティを穿くとはみ出て恥ずかしい。ならば上からブルマを穿けば大丈夫。そんな防護案だ。
「え、でも……」
「だって、その、なんかちょっと恥ずかしくて……」
奈津子達だって恥ずかしいから同意してくれると思ったのに、意外にも困り顔。
「いいじゃん、ブルマ穿きたいなら穿けば。別に関係ないんだし」
和美はぶっきらぼうに言うと衣装に着替え、パーカーを羽織る。柔剣道場までの間、彼女もおかしな衣装姿を隠したいのだろう。
「うん、そうね……関係無いもんね……」
奈津子はそう言うとパーカーを羽織り、髪を纏めていた。
「そう。じゃあ、お言葉に甘えて……」
優奈はブルマを穿こうとすると、ぱきっとプラスティック音が聞こえた。
「なんだろ？」
何か踏んだのかもと周囲を見るが、特に何も無い。気にせずブルマを穿くと、二人にならってパーカーを羽織る。
「んーと……」
部室の隅っこにある棚をがさごそ弄る和美は飴の包みのようなモノをポケットに入れる。
「奈津子、あれは？」
「え？　あ、うん。えと、まだあったと思うけど」
引き出しを引こうとすると、無理に詰めたせいか引いた途端、中身がばらけてしまう。
「あ、もう……」
床にばらばらっと散らばる。それは優奈の足元にも転がって来る。
「……」
それは駄菓子屋で打っている小分けのチョコレートに似た錠剤だった。
「なにかしら……」

拾い上げると不順、痛という文字がかすかに読み取れた。鎮痛剤か何かだろうかと思っていると、奈津子がひったくるように奪う。
「ありがと。もう和美ったらおっちょこちょいだから……。優奈は先に行ってて。すぐに片付けていくから」
いつになく早口でまくしたてる奈津子に背中を押され、半ば追い出される格好で部室を出た……。

＋＋

「それでは、県大会決勝進出を祝して、かんぱーい！！」
部長の音頭に続いて参加者たちは飲み物の入った紙コップを掲げる。
ごくごくと喉を鳴らして「ぷはー」と息を着き、拍手する。
「鬼瓦第二校野球部、初のベスト4突破。さらに、あと一勝すれば優勝！ そして全国大会！ これまで苦節十数年、ようやく悲願が達成されるわけです！ 今日はささやかながら前祝として宴会をしたく集まってもらいました。今日この場は皆でお互いの功を労いあい、日々の辛い練習を一時忘れて楽しみましょう！」
「なげーよ！」
「さっさとおわれ」
カンペを見ながらくどくどと話す部長に信彦達のヤジが飛ぶ。彼らは乾杯も待たずにと料理に手を伸ばし、飲み物を飲んでいた。
「ええ、それでは短いですが、私からの話は以上です。失礼しました」
部長はまだ途中のカンペをくしゃくしゃと丸めると、一礼して正座していた。
あぐらをかいて上座に座る信彦達と比べるとつつましいのは部長の方だろう。彼らは手酌なのに、三人には優奈達がチア部の衣装でお酌をしているのだ。
「ゆーなちゃん、俺にもちょうだいよ。ほらほら」
「もう、先輩ったら……」
作り笑いで酌をする。
「優奈君も飲むといい。さ、お返しについでやれ」
信彦は俊夫に瓶を渡す。
「へっへ～、りょうかーいっと……、優奈ちゃん、のーんでのんでのんで～」
ホストのような煽りで飲み物をつぐ俊夫。それは他の飲み物と違ってブドウの紫色と甘い香りがした。
「ほらほら、カズミンも飲んで飲んで～」
「ありがと」
和美は受け取るとごくごくと飲み下すので、優奈も自分だけ飲まないわけにもいかず、ごくりと呷った……。

「……んぅ……　」
濃い甘みとまどろむ深みがある。ぐっと頭の奥に響く感覚と、どっと身体にのしかかる倦怠感。前にも一度そんなことがあった気がする。
「おお、言い飲みっぷりだね……ほらほら、こっちもおいしいよー　」
「そんなにいいですよ……。それよりも、先輩達こそ飲んでください　」
新たにつがれるのはオレンジ色の飲み物。こちらはすかっとする香りと甘みと酸味があった。
「ん、おいしい　」
クーラーボックスで氷水の中で冷やされているのでキンキンに冷えている。なぜか締め切られた場内ではありがたかった。
「そう？　おいし？　んじゃもっと飲もうね……　」
「いえ、そんなには……あの、ありがとうございます……　」
軽く一口飲んでとりあえず置く。冷たくて喉を潤してくれるのだが、飲むたびに身体に何か重みが被さって来るような錯覚がした。
「時に、優奈君、竹中に話をしたいのだが、いいかな？　」
「あ、はい……お願いします……　」
床がぐら～っと揺れる。地震でもないのにどうしてなのかわからない。
「……おい、お前らはもう練習に戻れ……　」
遠くで純一の声がしたような気がする。部員達が立ち上がり、礼をして去って行く。
「……市川さん、大丈夫？　」
聞き覚えのある声がした。たしかよく和正と一緒に居た……。
「……渡辺、さっさと行け　」
そう。渡辺、渡辺芳雄だ。彼は何を心配しているのだろう？　わからない。
「……優奈、ねえ、優奈。大丈夫？　」
奈津子の声がする。
「……うん、平気だよ……。ごめん、ちょっとぼうっとしちゃって……　」
かぶりを振って頬を叩く。まだ目の前はぼんやり揺れるけれど……。
「熱中症なんじゃなーい？　今日暑かったしさ……ちゃんと水分とった～？　」
「うむ。前も優奈君は倒れたからな。もう少し飲んだ方がいいんじゃないかな？　」
「はい、いただきます……　」
言われるままにオレンジの飲み物を飲む。
やはり美味しい。普段飲むものと違って深みとコクがあってすごく甘い。香りも良くて冷たくて……、それなのに身体が熱くなる。
「なんか美味しいですけど、これ……変ですねえ　」
なぜかくすっと笑っていた。
「へー、優奈って笑い上戸なんだ　」

「え？　もうからかわないでくださいよ……も～　」
特に楽しいわけでもないのだが、なぜかけらけら笑いが起きる。
「あはは、笑ってる優奈ちゃん、かっわいー！　ほら、もうちょっと飲もうか？　ねえ、のもっか？　」
「そんなにのめませんよ……あっ！　」
さし出した紙コップがぶれて、びしゃっとこぼれてしまう。
「あらら、ごめんなさい……。私ってばどじですねぇ、えへへ……もう、ブルマ濡れちゃった……　」
「優奈ちゃん、ブルマ穿いてるんだ～。ダメだよー、衣装の下にそんなのはいちゃ～　」
「だって、この衣装恥ずかしくないじゃないですか～、この衣装……だからブルマ穿いてたんですよ～だ　」
優奈は先ほどから気分が大きくなり、たかがブルマぐらいと見せつける。
俊夫は食い入って見つめ、純一も信彦も硬派を気取りつつ、じっと盗み見る。
「もう、なに見てるんですか～？　エッチな人は嫌いですよ～だ　」
性的な視線を受けると今度はむっとしてスカートを引っ張る。けれど加減が悪く、そのまま下に引っ張り過ぎ、ブルマごと下げてしまう。
パンティの上から穿いていたせいで下腹部よりさらに下の肌を見せてしまう優奈。揃えていない陰毛がかすかに見えていた。
「……おお　」
さらに間近で見ようと俊夫が近づくが、二人に肩を掴まれる。
「なんだよ、いいじゃんか　」
「まあまて……。おい、奈津子君、優奈君はブルマが濡れたみたいだし、着替えさせたほうが良いんじゃないか？　」
「え？　あ、はい……ね、優奈、着替えてこよう　」
「え、でも着替えなんて私、持ってきてないし……　」
「あるから、ほら、ね？　立って　」
言われるままに立ち上がろうとする優奈。そのまま飛び上がって天井にも届いてしまいそうな気がした。
「ん～　」
立ち上がると頭がふらふらする。痛いほどではないが、ぐんにゃりと世界がふらついているような感覚。
「ほら、こっち……　」
「うん……　」
奈津子に引っ張られて向かう先はシャワールーム……。

＋＋

祝勝会もそこそこに追い出された芳雄は、炎天下の中、グラウンドを駆け回っていた。
昼間から野球の練習ができることと、補欠ながらも途中出場ができることで最近は楽しかった。特に次の試合で勝てたら全国大会だ。まだ未熟ながらに大舞台を経験したく思っている。
ただ、一方で違和感もある。例えば最近の急な野球部の快進撃についてだ。
去年までは弱小野球部として練習時間も場所も与えられず、顧問もやる気が無く、練習試合すら断られる立場だった。
それが三月に三人が入部したことで劇的に変わった。
打率6割にも届く一番バッターの純一と、抜け目ない俊夫。そして強打者の信彦。
守備でも俊夫は猫のように白球に飛びつき、肩の強い信彦は外野からホームまでレーザー光線のように戻す。
三人の加入で精神的な強みが出てエラーや見逃しが減ったことも大きい。練習試合も多く組まれるようになり経験を積めた。
そこは確かに感謝したいのだが、何かしら大きな試合の後、チア部の和美、奈津子と信彦達三人だけでマッサージと称し、柔剣道場に籠る。
前に一度後輩が覗いたらしいが、チア部の衣装で和美が信彦に乗っかって背中を弄っていたというので、素人ながらにマッサージをしているだけなのだと結論付いている。
守備練習の途中、フライのつもりが大きく跳び過ぎ、部室棟まで転がって行ったことがある。その時、悪戯心が出て柔剣道場を覗いたのだ。その時は誰も居らず、ただ鞄やタオルがそのまま置かれていた。
まさか五人一度にトイレに行くはずもなく、不思議に思って周囲を探った。けれど特に目立った違和感はなく、その一方で誰も戻って来ないという確かな違和感が残った。
その頃からどうも信彦達が信用できなくなっていた。
そして予選、県大会についても同じ。
芳雄が途中出場する時は決まって俊夫の代わりだった。
ピッチャーでも長距離打者というわけでもないのに休憩を取る彼だが、ベンチに戻るといない。いつも試合終了時間ぎりぎりまで居なくなっているのだ。そして戻ってくると、しきりに暑い暑いと言って汗を垂らしていた。
ベンチも涼しくはないが、そこまで汗をかくようなこともないので、一体どこで休憩しているのか不思議だった。
今日も同じく不思議に思い、わざと捕球エラーをして柔剣道場へと近づいていた。
下に付いている通気口は全て閉まっている。そしてやはり誰も居ない。

ジュースやお菓子は残っているのになぜだろう？　集団でトイレというのも考えにくい。今度こそ調べてやると、柔剣道場をぐるりと回る。

「……？」

そして物音を聞く。シャワールームの方だった。

「……んっ……んはぁ……やめ……やめてください……あぁん！　そこ、だめですぅ……」

壁越しで聞き取りにくいけれど、耳に絡まるような悩ましい声。しかもそれは……。

「何してるんですか？」

「！！」

背後から声がして芳雄は思わず口をおさえる。

「……！　北村さんか……なに？　何か用かな……」

まさか三人かと思って慌てるが、もともと女の子の声だったとホッとする。

「今日は暇だったんでプールに来たんですけど、そしたら渡辺君が練習さぼって柔剣道場の壁にくっついて……ヤモリかなんかですか？」

「いやあそれがその……」

くすっと笑う春子は地味目だけれど可愛らしい。最近は和正の繋がりで英語の時間に会話グループになったことと、掃除当番押し付けを手伝うことで話す機会が増えた。そのおかげで気付いたことだった。

「そうだ！」

芳雄は声を上げて慌てて口をふさぐ。春子を手招きして校舎付近へと移動し、注意深く周りを見る。特に誰もいないことを確認してから小声で話し始めた。

「あのさ、今からちょっと頼まれてくれないかな。和正に電話してもらいたいんだよ！」

「田所君にですか？　えとなんて言えばいいんです？」

「うん、それが、ちょっと市川さんのことで気になることがあるんだよ。その、言いにくいから言わないけど、とにかく柔剣道場まで今すぐ来いって伝えてくれ」

「わかりました。田所君に来てってことですね。はい」

詳しい説明も無しに頷く春子はパタパタと校舎へと走っていく。彼女は和正の電話番号を聞かずに走ったけれど、つまりそういうことなのだろう。

「……和正ってもてるんだな」

クラスで春子が掃除を押し付けられたりした時、自分は力になろうとしなかった。当然といえば当然であり、それならせめてと、柔剣道場へと向かった……。

＊＊

「和正〜、電話よー 」

「はーい 」

部屋で勉強をしていた和正はちょうど つまっていたところで鉛筆を置く。電話ならきっと優奈で、応援が終わったからどこかで会おうという誘いだろうと思った。

テキストを鞄に入れてそのまま階段を降りると、母は変な笑みを浮かべていた。

「女の子よ。うふふ 」

「何が女の子だよ。どうせ優奈だろ 」

下世話な勘繰りに受話器をひったくると、咳払いしてから話し出す。何度電話している間柄でも、やはり慣れないものだった。

「おほん、ああ、なんだ？ もう応援終わったのか？ 」

『田所君？ 私、北村です 』

「え？ 北村さん？ ええと、どうかしたの 」

意外な応答に和正は頬を掻く。

『えと、わからないけど、とにかく急いで学校に来てほしいの。渡辺君が柔剣道場で待ってるって言うから、それで…… 』

「柔剣道場？ 芳雄が？ 」

『市川さんのことでって言われたの。それ以外は聞いてないわ。なんか話しにくいから話せないって……それで、とにかく電話してって…… 』

「……わかった。すぐ行くよ。北村さんは……、帰った方がいいよ。とにかく急ぐ 」

『田所君、なんか変だし、警察に…… 』

話を遮り受話器を置く。まだ通話中らしくぼそぼそと電子音が聞こえるけれど、構っていられない。

「和正？ どうかしたの？ 」

電話声の不穏さに顔を顰める母だが、説明の暇すら惜しい。

和正ははだしで飛び出しそうになって慌てて靴を拾うと、自転車を担ぐ勢いで道路に飛び出した……。

＊＊

午前中の晴れ間が嘘のように雲が広がる。西の空からごうごうと大気を揺るがす音が響く。ポツリと長い雨が頬に触れたのを皮切りに、ざーっとシャワーのような雨が降る。

「……！ 」

自転車を走らせ鬼瓦第二校を目指す。いつもなら走って15分。自転車なら4分とかか

らない距離が、突然の雨に阻まれて思うように進まない。
泥にタイヤを取られて転び、顔からダイブする。服がぐちゃぐちゃに汚れて私服だと気付く。校内は制服体操着、各ユニフォーム以外での立ち入りを禁止しているのを悠長に思い出す。
「……」
自嘲気味に嗤い、自転車を起こす。
雨の中に浮かぶ校舎は灰色で、雨が瞳に滲んで歪んで見えた……。

＋＋

「おい渡辺、何してるんだ？」
芳雄が柔剣道場のどこかが開いていないか探っていると顧問が来ていた。
「すいません、ボール探していて……」
ボールを探していたのは事実だが、既に見つけて部室棟の前に隠しておいた。見つかるはずの無いものを探し続ければ相応に時間稼ぎができると考えてのことだった。
「こんなところまで飛ばせる奴がいると思うか？」
問題はグラウンドから柔剣道場まで飛ばすとなれば、それは屋根越えをしなければならないわけで、今ここに居ることの説明にはならなかった。
「時田先輩ならもしかして……」
できるだけにこやかに返すけれど、顧問の表情は硬い。
「お前、試合に出たくないのか？　どうなんだ？」
「出たいですけど」
「なら余計な事してないで練習するべきなんじゃないか？」
言葉の意味は正しいけれど、含みを読み取れないほど芳雄も馬鹿ではない。むしろ裏が読める。そもそも確信がある。だからわかる。顧問もぐるだろう。
「そうですねえ、俺も小松先輩に守備のアドバイス欲しくって」
「後にしろ。マッサージ中なんだ」
「そんなに良いマッサージなんですか？　チア部の子なんて素人なのに変ですね？」
少しの疑問を口にすると、べらべらと続いてしまう。
「渡辺、賢くならないか？　野球部が強くなって、試合が増えて、練習場ももらえて、いいこと尽くめじゃないか？　余計なことをして、またもとの弱小野球部に戻りたいのか？」
「……」
「わかったら来い。そうだな。せっかくだし面白いモノを見せてやる。余計なことを考えなければお前もおかずが増えるし、その内一人ぐらいは抱け……マッサージしてもらえるぞ。童貞なんだろ？　なあ？」

うだ つの上がらない顧問だとは思 っていたが、さらに下種だと知り愕然とする。そして、きっとこの中では……。
「ええ、そうなんですよ。俺も良い思いしたいし、よろしくお願いしますね 」
「ああ、考えておいてやる 」
所詮は性欲を持て余した猿とでも言いたそうに鼻で嗤う顧問。彼が戻ろうと振り返 った時、その足が止まる。いつの間にか背後に人が居た。
「なんだお前…… 」
芳雄はその隙を付いて顧問のグラジャンを脱がせにかかる。
「和正手伝え！ こいつをふんじばるぞ！ こいつは屑だ！ かまやしない！ 」
もたつく顧問を羽交い締めにして抑え込む。そのまま地面に伏せさせ、ズボンを下ろして中途半端にしてカタ結びする。
呆気にとられる和正はわけもわからずに言われるままに押え、ベルトを奪 って両腕を縛る。ズボン脱がせてそれで念入りに縛る必要があるのかわからないが、普段無茶をしない芳雄がおいたをするには理由があるのだろうと手伝う。
「ググ、お前ら、こんなことしてタダで済むと思うなよ 」
「うっせーばーか！ てめえがしたこと考えろ、タコスケ！ 」
激しい雨だが叫ばれては困るとついでに靴下も脱がせてさるぐつわを噛ませる。
「いいのか？ 」
「かまやしないって。それよりも中だ、急げ 」
戸惑いを隠せない和正の背中を押し、芳雄は柔剣道場の正門へと走 った。

＊＊

柔剣道場のドアを前後させる。鍵はかかっているが、鋲が降りておらず、観音開きのドアは無理やり引っ張ることで空きそうになる。
「ぐぐぐ！ 」
思い切りドアを引っ張るが、あと少しでつっかえる。
「くそ、あかねえ…… 」
「もう少しだ 」
「ぶち破るか？ 」
「しゃーねーか！ 」
「待ってください！ 」
二人がドアをひっぱっていると、どこに居たのか春子がやってきて、隙間から手を入れて鍵を開けてくれた。
反動で後ろに倒れた二人はおしりを擦る。
「さんきゅ、北村さん 」

「はい 」
「よし、行くぞ 」
和正は言われるが早いか土足で入り込み、叫ぶ。
「優奈！ どこだ！ 」
シャワールーム近くに並べられたマット。バスタオルがシーツのように敷かれており、黒い布が捨てられていた。
拾い上げるとそれはゴシック調のメイド服。何があったのかと眉を顰めてしまうと、周囲から夕飯頃、父が好みそうな飲み物の匂いが漂う。
「なんだこりゃ、なんでこんなもんが…… 」
芳雄は手近にあった瓶を拾い上げ、中を確認してうっと目を瞑る。
「なあ、和正、シャワールームの方…… 」
意味深なマットと、その向こうの個室。
しかし、ドアを開けるも、もぬけの殻。タイル張りの室内は床がヌルリと滑り、白味を帯びた濁り汁が垂れていた。
何かが行われていたであろうむっとする臭いが漂っており、何かの包みと薬のPTP包装が落ちていた。
沈痛、重いと書かれた包みを見て春子の表情が曇る。
「これって……えと…… 」
「っ…… 」
使われた包みを拾い上げて芳雄は舌打ちする。
「もう一つの部屋は？ 」
和正が気付き、駆け出す。
しかし、結果は同じ。白い濁り汁とむっとする臭い、そして包みとぬるぬるした粘液入りのペットボトルが転がっていた。
利用者は洗濯後の勝手口から逃げたのか、鍵が開いたままだった。
「なんだよ、どういうことなんだよ……。なあ、優奈がどうしたってんだ？ 教えろよ、芳雄！ 」
訳が分からない和正は壁を叩き険しい表情で芳雄を見る。
「すまん、俺がもっと早く気付いてたら…… 」
「なんだよ、何かあったんなら教えてくれよ……。俺はさっぱりわかんねーよ 」
「言い合いはあとにしましょうよ。今はその、市川さんを追わないと……いけません。この雨ですし、そんなに遠くにはいけないし……だから…… 」
冷静な春子の言葉に芳雄も頷く。
「ちくしょー！ 」
一人激昂する和正は勝手口を開けると雨の外へと飛び出した……。

逃亡者は意外にもすぐにみつかりそうだった。
雨の中逃げたせいか、部室棟に不自然な足跡がある。向かった先はチアリーディング部の部室。
「……」
ドアには鍵がかかっていたが、思い切り蹴飛ばしたことで中から悲鳴が聞こえた。
「中に誰か居るんだろ。出て来い」
「……い、いま着替えてるのよ。出られるわけないでしょ。なんなのよ！　け、警察呼ぶわよ」
聞き覚えのある声。クラスメートの奈津子だと気付く。
「別にいいぞ。なんならこっちで呼ぶ」
芳雄がきっぱりと告げると、中はごそごそと静かになる。
「逃げるなよ。窓側も見張ってるんだからな」
「……わかったわよ。ちょっと待って……」
はったりをかますが効果抜群だったらしい。
室内ではごそごそ音を立てていたが、しばらくしてドアが開けられる。
「……なに？　なんの用？　きゃっ！　ちょっと、引っ張らないでよ……なにするのよ！　人を呼ぶわよ！　痴漢！！」
ドアを開けると同時に芳雄は出迎えた奈津子の手を引っ張り外へ出す。顎で和正に入るように示す。
「おい、優奈！　優奈……！？　おい、優奈！！」
室内に響く和正の声。全てが知られたことに奈津子は抵抗を示さなかった。
「おい、和正……和正？」
芳雄も狭く薄暗い室内に入り、愕然とする。
室内には信彦と俊夫、純一、それに優奈の姿があった。
優奈は服こそ体操着姿だけれど、そのサイズがおかしく、無理やり着せたのか裾が中途半端にスパッツに入っている。そのスパッツも男子用のもの。彼女が自分で穿いたとは思えない。
表情も虚ろで息が荒い。ときおり「うん」と艶めかしく喘ぎ、腰をかくんと前後させていた。
「お前ら、優奈に何をした！？」
震えた声で和正が言う。
「なにもしていない。誤解だ。ただ祝勝会で飲み物を飲んでいたら、急に倒れてだな。それで慌てて保健室へ運ぼうとしたら雨が降って、濡れないようにここへ来たわけだ」
言い繕うも穴だらけの弁明に和正が納得するはずもない。

「じゃあなんで優奈は男物のスパッツ穿いてんだよ！　お前、ふざけるなよ 」
拳を握る和正は今にも飛びかかってきそうな気配だ。だが、信彦も三対 一であり、余裕がある。
「それが優奈君が粗相をしてだな。仕方なくスパッツを貸したわけで…… 」
「あんっ…… 」
かくっと腰を動かした優奈。スパッツの隙間からプラスチック製の丸いモノが落ちる。
それはヴヴヴと音を出して揺れている。
「……？ 」
それが何かわからない和正は首を傾げる。その隙を突いて純 一が飛びかかった。
「危ないっすよ！　先輩！ 」
それを見越した芳雄が防ぐふりして突き飛ばす。
ロッカーに突き飛ばされた純 一を見て信彦は優奈を余所に和正に殴り掛かる。
「上等だ！！ 」
和正は低い姿勢になって思い切り信彦の腹を殴る。せりあがる吐き気に戸惑う信彦。精を出したせいもあって動きが緩慢であり、激昂したままの和正の勢いに気圧される。
「ごふ！ 」
さらに股間を蹴上げる和正。三対 一なら容赦もできないと、えぐいことにも躊躇が無い。
俊夫も加勢するが、それに気づいた芳雄が背後から組み付く。
「てめえ！　離せ！　野球部なんだから邪魔すんな！　うぐ、うぐぐ……ぐぅ 」
「危ないっすよ先輩、危ないっすよ！ 」
芳雄は俊夫の言葉を遮って裸締めをする。もともと身体の小さい俊夫では振りほどけず、しばらくもがいてひじ打ちを仕掛けるが、がくりと腕を下ろす。
「どうしたんすか？　先輩、大丈夫っすか？ 」
あくまでも先輩を気遣う後輩を演じる芳雄は俊夫を揺さぶる。彼が本当に落ちたかを探ってから純 一に向かって捨てた。
「ぐわ…… 」
立ち上がろうとしていたところで俊夫と頭をぶつけてしまい、そのまま尻餅を着く。
「くそ、こんなことしてただで済むと思ってるのか？　決勝まで行ったんだぞ？　そんな野球部の部員に暴力沙汰起こしてただですむと思ってるのか？ 」
信彦は腹を殴られ金的を蹴られ、尻餅を着いたところで頬を蹴られた。
血反吐を吐きつつ、立ち上がろうにも和正がバトンを構えている。動けばどうなるか？
信彦は苦々し気に睨んでいた。
「だからどうした。たかだか野球で勝ったらこんなことして良いと思ってるのか！？ 」
「…… 」
バトンがへしゃげるぐらい強くテーブルを叩く。血走った眼付の和正を宥める術はない。
「おい！　何をしているんだ、開けなさい！ 」

しばらくにらみ合っているとドアを叩く音がした。杉田の声だった。
「……どうする？　和正……」
「待たせておけよ。それよりも優奈になんかかけてやってくれ……」
ぼんやりしていた優奈は目を瞑って涙していた。
「……かずまさくん……けんか……だめだよ……あたしなんかのために……」
うわ言のように呟く優奈に和正はタオルをかけて抱き起す。
「……優奈、ごめん、俺がもっとちゃんとお前のこと、見てたら……こんなことに……」
「……かずまさくん、ありがと……いつも、あたしのこと……まもってくれて……大好きだよ……。あたし、大きくなったら……和正君の嫁さんになるんだ……」
「……優奈……？」
うわ言のように呟く彼女の言葉は遠き昔の、綺麗な頃の思い出の中に……。

＊＊

背中に感じる重み。意識が朧で重心が重なるようにしてくれないから。
小降りになれど霧状に肌に纏わりつく雨は容赦なく体温を奪う。
これが夏の日だというのが信じられない。
背中に感じる重さと温かさが物悲しい。
雨が洗い流してくれるのだろうか？　きっと彼女は夢の中で、大きくなった頃の夢を語っている。それが自分であるのなら、どうしてその夢を守ってあげられなかったのか……？
背中の重みは今更の後悔が倍増しされている。
雨のおかげで涙は誤魔化せるが、ぐずる自分の声は聞こえているか、それとも雨音が隠してくれるのか？
「優奈、ごめん……俺……お前の事……守ってあげられなかった……。俺が、馬鹿だから……俺が、格好つけたから……俺が頑張らなかったから……」
あの時、それともいつでも、常に選択肢があった。気付いて、頑張って、がむしゃらに、とにかく頑張って追いついて、隣に居られる人間になれば、そうすればこんな結末を防げたはずなのに……。
後悔が先に立たない理由がよくわかる。当然だ。背負うのだから。
こぼれる涙も、垂れる鼻水も拭えず、ただ彼女を、せめて今だけは背負っていたい。

チャイムを押してインターフォン越しに名を名乗る。優奈の母はあからさまに不快感を示した。
優奈を連れ帰って来た。そう伝えたかったが、途中で切られた。
インターフォンが切られて五分、待たされた。だからもう一度押して、名を名乗った。
また切られそうになったところで声を荒げた。
――それでも母親か……。
無言の時間が流れた後、不機嫌そうな足跡と、雑に施錠を外す音がした。
「……田所君、君ねえ……！！」
怒鳴り返すつもりだったのだろう。けれど、和正が背負う優奈を見て言葉を飲み込んだ。
ずぶ濡れの体操着姿で和正に背負われる優奈。口元は嘔吐物と白みがかった粘液で汚れており、腕には虫刺されとは言い難い赤い染み……。
「優奈！　ゆうな！！」
叫び、掴みかからん勢いで優奈を揺さぶる。
「んぅ……お、おかあさん？　ここ……どこ……？」
焦点の定まらない優奈はぐるんと頭を揺らす。まだ気分が悪いのか、ううと粗相する。

「貴方、一体優奈に何をしたの！　やっぱりあんたみたいな不良と付き合わせるんじゃなかったわ！　警察呼ばないと。お父さんにも……連絡……、ちょっと！　いつまで居るつもり！　優奈を下ろしなさい！　いやらしい！」

優奈をひっぱり、和正から奪う。ぼんやりする彼女は自分で立てず、ぐしゃりと膝から折れる。

「優奈、しっかりしなさい……ほら、自分で立って……」

「運びます」

「触らないで！　うちの優奈に触らないで！　この強姦魔！」

叫び突き飛ばし、怯んだ隙に優奈を引きずる母。泥と砂利で擦れる優奈の足が玄関をくぐったところでドアがバンと絞められた。念入りに鍵を掛けられる。

インターフォンを押して待つ。

反応など無い。

内側からはヒステリックに喚く声が聞こえる。

また、間違えたのだろうか。

そうは思いたくない。

けれど……。